

好評発売中

[JIIA研究 9]

アジア太平洋の 多国間安全保障

森本 敏 編

●A5判・並製・314頁・定価3570円(本体3400円)

アジア太平洋にはいくつもの安全保障関係が並存する。一方で、国家間の力関係をめぐる競争と対立がある。大国間での相互の力関係をめぐる競争や対立、東南アジアや北東アジアにおける地域的な力の均衡を求める各国の行動などが顕著である。他方でアジア太平洋には、冷戦の終結以降、多角的な安全保障システム構築の動きがあり、ARFやASEAN+3(日中韓)の安全保障対話、北朝鮮問題を契機とする日米韓・米中朝などの動きや、韓国、北朝鮮に日米中露を加えた地域安全保障の構想がある。こうした多様な動きが将来どのように相互に関連するかは、この地域の安全保障の行方に大きな意義をもつ。

本書は、近年この地域で注目されている協調的安全保障の概念を手がかりに、アジア太平洋における多国間の安全保障システム構築への動きを分析し、今後を展望する。

●目次

- 第1章 アジア太平洋の安全保障課題——現状と展望／森本 敏
- 第2章 協調的安全保障とアジア太平洋／山本吉宣
- 第3章 南北首脳会談と「大国間の協調」——朝鮮問題多国間協議の成立要件／倉田秀也
- 第4章 アジア太平洋の地域制度と安全保障／菊池 努
- 第5章 米国の東アジア戦略と日米同盟——変遷と展望／森本 敏
- 第6章 国連による「紛争予防」と日本の役割——東ティモールを例として／山田哲也
- 第7章 アジア太平洋のトラックIIプロセス——CSCAPの事例／中山俊宏
- 第8章 ARFにおける予防外交の展開／神保 謙
- 第9章 アジア太平洋地域における海洋の安全保障／星野俊也
- 第10章 日中防衛交流の現状と課題／森本 敏
- 終章 アジア太平洋の安全保障——将来展望と日本の課題／森本 敏

財団法人 日本国際問題研究所

国際問題文献紹介

声振れ、そして「われら」の世界を立ち現わせよ
——二世紀の国際関係研究へ向けて

Steve Smith, Singing Our World into Existence: International Relations Theory and September 11 (*International Studies Quarterly*, Vol. 48, Issue 3, 2004, pp. 499-515.)

本論文は、ISA (Intentional Studies Association) の会長となったエクスセター大学のスミスの就任演説である。どちらかと言うと、いわゆる実証的な論文が多かった『インターナショナル・スタディーズ・クォーターリー』誌であるが、今回は冒頭に、「ベラスケスの『侍女たち』

が印刷されており、スミスの意気込みを感じさせる。そして、期待にたがわず、その内容もまた非常に力の入ったものとなっている。

スミスの出発点は単純明快である。第一に、国際関係研究(IR)という学問的行為は現実と無関係ではなく、この世界の現実を生み出したことに対して正負両面でコミットしている。第二に、IRという学問は決して価値中立的でも没規範的でもなく、倫理とは切り離せない。第三に、特定の国のIRに限らず、すべてのIRという営為は、西洋とりわけアメリカの行動を正当化し、支える役割を果たしている、という。

そこでスミスはまず、マックス・ウェーバー「職業としての学問」をもとに、リアリズム、リベラリズム、そしてウェ

ント的な方向性を代表とする、ポストモダンの議論と袂を分かち実証に走ったコンストラクティビズム、以上三者のもつ、客観性や価値自由への忠誠の有り様をたどる。次に、今度は彼らの基礎にある合理的選択理論(RCT: rational choice theory)の基礎的性格を検討し、その利点も評価したうえで、今度は「職業としての政治」を引きながら、RCTが没価値的な装いの奥にもっている政治性、つまりそれが唯一の「科学的」な方法として覇権をもつことで、無数にある他の学問的な手法が不当に軽視または無視されがちであることを明らかにする。

実際にはあらゆる物の見方は中立的ではないにもかかわらず、そうであると主張することによって、物の見方の一つに過ぎないRCTが不当に優位に立っているのが現状なのである。

さらにスミスは、こうした国際関係理論の有り様が、九・一一米同時多発テロを生み出すような世界を生み出してしま

つたということ、もう少し穏やかなトーンで言い直すならば、国際関係理論がある観点から物事を「見る」ことによって「見えなく」なってしまうていたことが、現在の世界の困難を生んでいる、ということ論証していく。学問は心情倫理だけでなく責任倫理を負わざるをえないのであり、学問の価値中立性という逃げ口上は通用しないのである。

彼は国際関係理論がもつ一〇個の根本的な特質を挙げる。すなわち、①国家中心主義、②国外と国内の峻別、③経済と政治の分離、④グローバルゼーションの均一化効果の過大評価、⑤ジェンダーやエスニシティ研究の周縁化、⑥国家間戦争以外の暴力への目配りの少なさ、⑦構造還元主義的傾向、⑧合理性がもつ、普遍性や唯一性への過信、⑨アイデンティティーの軽視、⑩説明の重視と了解の軽視、である。結局のところ、これらの特徴をもつ国際関係理論とは、豊かで帝國的な大国の視方を反映して生み出されてきたのである。

なく豊かな複雑さへと解き放つていくこと。これまでも展開されてきた、個々の指摘自体はすでにおなじみの部分の多い国際関係論「論」が、スミス自身の痛切な自己反省からも見受けられる西歐人にとつての九・一一の衝撃の深甚さと相まって、誠実な成熟をみせた渾身の論考、と言いつる出来映えである。

ウェーバー、マグリットやフーコー、そして原題の元になっているブルース・チャトウィンが描き出すアポリジニの物語から議論を生み出すスミスの狙いは、竹内啓、大森莊蔵、吉川弘之や真木悠介などに依拠して同様の問題を追求してきた評者（自我・国家・国際関係）『国際社会科学』第五二輯（二〇〇三年）参照）にとつては、我が意を得たり、という思いであり、こうした方向性を論じていくことが、二一世紀の国際関係論を探索するうえで有効であり必要であることがまた一つ、遂行的に示されたような心強さを覚えるものである。（芝崎厚士）

続いてスミスは、国連開発計画（UNDP）の人間開発報告、および人間の安全保障論を引き合いに出して、現在世界に生じている悲惨や暴力のすさまじさを描き出す。しかし国際関係理論は、白人で、豊かで、男性のパワー・エリートたちの世界観を反映したものであるが故に、こうした問題を受け止める素地が十分なのである。このようになるのは、IRという学問が、(1)大国の視点からみた国家間の相互作用の分析から出発し、(2)イギリス、アメリカといった、世界を指導する大国において発展し、(3)効用最大化の原則に依拠したタイトな演繹的枠組みに基づく知識の蓄積に基礎をおいて展開されてきたからである、とスミスは考える。したがって、IRはアイデンティティーや主観性の問題、唯一の説明ではなく無限の偏差をもつ多種多様な自己・他者了解の豊穡さを切り開く方向へと向かわなければならぬ、ということになる。

ここにおいてスミスは、ルネ・マグリ

ットの数々の絵画、そして『言葉と物』での分析でも名高いベラスケスの『侍女たち』に関して、当然のことながらミシェル・フーコーに多分に依拠した、日常の「現実」に潜む多種多様な未知なるものへの感受、そして世界を描写する側と描写される側（主観と客観、主体と客体）の不分明さ、一意的な説明に収束することにではなく、無数の解釈を許容し生み出し続けることにこそ「現実」の本質があること、などを明快に説く。そして最後に、合理主義者の強力な正当性をさらに強化する方向ではなく、ここまで論じてきたような方向性へと国際関係理論が発展していく希望を高らかに述べて、擲筆している。

学問の倫理と責任、方法論的多元主義、国際関係研究という学問自体が実はその時々々の国際関係や地球社会の関係の付置状況を反映していること（国際関係における西洋中心主義と国際関係研究における西洋中心主義の相似性、など）、現実と学問の間の乖離を単純さへの還元では

リアリスト・コンストラクティビズム

J. Samuel Barkin, *Realist Constructivism*, (International Studies Review, Vol. 5, No. 3, 2003, pp. 325-342.)

コンストラクティビズムの登場をリアリズムへの対抗として説明するのは、学説史における常套手段である。コンストラクティビズムの議論において最もコアな部分を形成するのは、国際政治が社会的に構成（構築）されるというプロセスへの眼差しであり（social construction）、リアリズムにおけるそれはパワーへの視点である。コンストラクティビズムの立場からは、リアリズムが含意する物質主義（materialism）

への批判と、アクターを合理的な主体と捉える前提への疑問が呈される。逆にリアリズムからは、理想主義へと陥りがちなコンストラクティビストの理論的な系譜が問題にされる。

今回紹介するサミュエル・バーキン（フロリダ大学助教授）は、このような捉え方に異議を唱えらるとともに、コンストラクティビズムと古典的リアリズムとの間の得てして見過ごされがちな親和性を強調する。より具体的には、コンストラクティビズムが旨とする国際規範の変

定価三八八五円(本体三七〇〇円)

「J・A選書9」 ミサイル防衛

森本 敏 編

新しい国際安全保障の構図

なぜ今、ミサイル防衛問題は国際関係における重要な課題なのか。どのような背景のもとに計画は進められているのか。そのシステムは技術的にどれほど信用できるか。ミサイル防衛は日本の防衛、日米同盟、東アジアの安全保障、グローバルな国際安全保障にいかなる意義を持ち、日本はこの新しい国際安全保障秩序へどう対応・参画するのか——共同研究の成果。

(A5判・並製・三五四ページ)